

CONTENTS

The 3rd International Symposium
on the Development within
Geoparks に参加して
— 日本初の世界ジオパークネットワーク加盟
ジオパーク誕生 —

根室市民フォーラム
“道東の自然と科学教育を考える”開催報告

2009年産総研東北センター一般公開
「移動地質標本館」出展報告

地質標本館夏休み体験学習イベント

ジオネットワークつくば 始まりました

ジオネットワークつくば
第1回サイエンスカフェ

スケジュール

編集後記

The 3rd International Symposium on the Development within Geoparks に参加して

— 日本初の世界ジオパークネットワーク加盟ジオパーク誕生 —

渡辺 真人 (地質情報研究部門)

表題シンポジウムは8月23日から25日まで中国泰安市で行われた。シンポジウムに先立ち、22日に世界ジオパークネットワーク (GGN) 事務局会議が行われ、そこで洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島の三地域が日本初のGGN加盟ジオパークとなった。

私の参加目的の一つは、三地域の審査結果を関係者に伝えることであった。23日の現地時間9時半頃正式発表があり、10時から私から関係者にメールで結果を知らせた。三地域がすべて審査をパスしたことを聞いたときには、申請書提出と修正を手伝い現地審査へ同行する中で高まってきた重圧から解放され、ほっとした。マスメディアの関心は高く、新聞・NHKニュースなどで広く報道された。やや残念だったのは、各紙が「世界地質遺産」とか「地質の世界遺産」と表現したことである。わかりやすくするための表現なのだろう。しかし、GeoparkはGeological parkではない (中国で地質公園と呼んでいるのはおかしいという意見がある)。地質・地形を含む大地のしくみと人間の関わりをわかってもらい楽しんでもらうのがジオパークの目的である。そのために地元が様々なコミュニケーションの手段を工夫し、そのコミュニケーションの質がジオパークの価値を決める。これらのことが「世界地質遺産」ではうまく伝わらない。機会あるごとに再度記者の方々に説明しており、少しでもわかりやすく伝える方法を一緒に考えたい。

シンポジウムでは、兵庫県豊岡市長を含む山陰海岸ジオパークの一行が活動を報告し、

写真1 世界ジオパークに認定された洞爺湖有珠山地域 (上: 昭和南山; 下: 有珠山)。





写真2 世界ジオパークに認定された糸魚川地域（上：小滝ひすい峡；下：糸魚川―静岡構造線の断層露頭）。

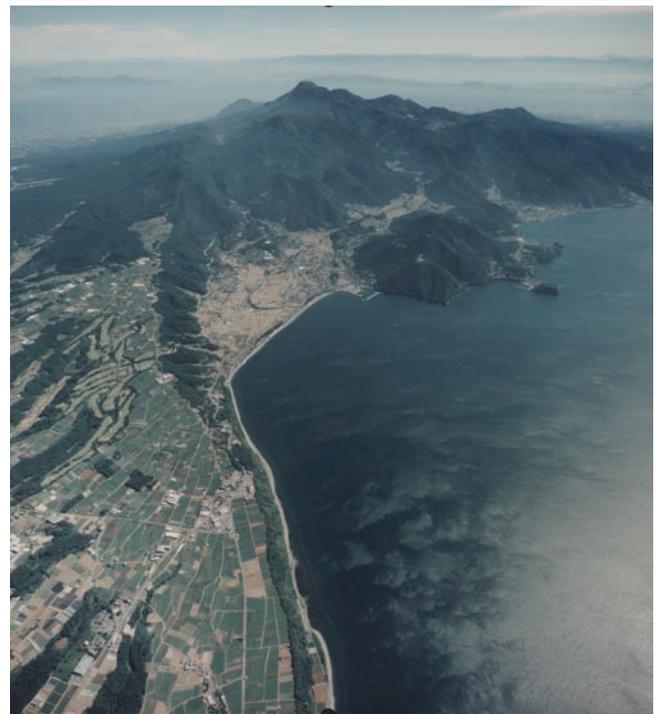


写真3 世界ジオパークに認定された島原半島地域（上：雲仙岳平成新山；下：千々石断層の活動によってできた段丘状の変位地形）。

加藤 GSJ 代表が日本の活動を紹介した。山陰海岸の人たちにとっては GGN の活動とその熱気に触れるよい機会となった。加藤 GSJ 代表の発表は日本のジオパークへの取り組みがよくわかった、と好評であった。

会議中 23 日には Asia Pacific Geoheritage and Geoparks Network (APGGN) の最初の Advisory Committee があり、渡辺が日本からの委員として出席した。数年後にはアジア太平洋地域のジオパークの GGN 加盟審査と再審査はこの委員会が行うことになる。

今回加盟した三地域はそれぞれこれまでの GGN のジオパークにない特徴を持つ。島原半島ジオパークでは、火山の脅威、中でも火砕流と土石流の恐ろしさを実感すると共に、温泉や湧水、水はけのよい土壌といった火山の恵みを併せて感じることができる。糸魚川ジオパークでは、プレート境界とも言われる糸魚川静岡構造線とそれに沿って発

達した塩の道、縄文時代に始まる伝統産業であるヒスイの活用といった地質と人間生活の関わりがわかる。洞爺湖有珠山ジオパークでは、20 世紀に 4 回噴火した活発な火山活動から大地が動くことを実感し、動く大地と人間が共存するにはどうすればよいか考えることができる。三地域にとって今回の GGN 加盟はジオパークとしての新たなスタートである。三地域を訪れる観光客が、ジオ（地球）に出会う喜びをどれだけ味わえるかが今後の日本のジオパークの発展にとっても重要である。

本稿の写真は世界ジオパークに認定された三地域から提供していただいた。ここに記してお礼申し上げる。

2009年産総研東北センター一般公開「移動地質標本館」出展報告

兼子 紗知・酒井 彰・吉田 朋弘（地質標本館），柳澤 教雄（地質情報研究部門），高橋 裕平（地質調査情報センター）

8月22日に開催された、産総研東北センター一般公開に「移動地質標本館」を出展しました。今年はチラシ増刷配付及び前日のTV中継により、予想を上回る1,470名の来場者でにぎわいました。

東北センター一般公開へはここ数年、毎年のように移動標本館を出展しています。

今年は体験型イベントをメインに、「きらきら光る【黄鉄鉱】をみつけよう！」「キレイで不思議な【砂】の世界を顕微鏡で見よう！」「【飛びだす絵本（火山）】を自分で作ろう！」というテーマで出展しました。

「きらきら光る【黄鉄鉱】をみつけよう！」では、黄鉄鉱ひろいを行いました。黄鉄鉱ひろいは、粘土鉱物のセリサイトを水洗いして、その中の黄鉄鉱の結晶を見つげようというものです。子供たちに体験しやすいように、水を入れたトレイを低めの台に置き、セリサイトの袋は200袋ほど用意しました。参加者には、スタッフからセリサイトの袋が渡されます。それを茶漉しに入れて、水を入れたトレイの中でゆすります。しばらくするとセリサイトが茶漉しの目を通して下に沈殿し、茶漉しの中にきらりと光る黄鉄鉱があらわれ、参加者たちから歓声があがりました。参加者の中には、なかなか黄鉄鉱を見つけられない人や、セリサイトがうまく水の中で崩せない人もいました。そういうときは、スタッフが手伝い、参加者は夢中になって、黄鉄鉱を探していました（写真）。最後にスタッフから黄鉄鉱について説明をし、袋に入れておみやげとしてもって帰ってもらいました。

「キレイで不思議な【砂】の世界を顕微鏡で見よう！」では、各地の砂を両面テープを貼った台紙につけて、顕微鏡で観察してもらいました。砂の種類は、東北地方の砂6種類（六ヶ所村・高田松原・仙台砂・釜谷海岸・東北珪砂・舞子海岸）と、比較のために四国地方の砂（桂浜・室戸・須崎）を用意しました。また、星の砂、黄鉄鉱など

も観察してもらいました。

参加者は、場所によって砂の粗さや、粒の丸さに違いがあることや、普段は灰色に見える砂も顕微鏡で見ると色々な色や煌きがあることに驚いていました。中でも東北珪砂が白くて人気でした。

今回使用した東北地方の砂は、地圏資源環境研究部門 須藤 定久氏にご提供いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

「【飛びだす絵本（火山）】を自分で作ろう！」コーナーは、すでに移動標本館ではおなじみの人気コーナーです。今年もたくさんの来場者がペーパークラフトを作っていました。他にも、エキジビッター、砂変化などを展示し、販売コーナーでは絵葉書セットと鉱物トランプを販売しました。

予想を超える来場者に、各体験コーナーは1日中、行列ができる盛況ぶりでした。一方、顕微鏡の電池切れや、資料の調整不足、スタッフの交代要員確保が不十分だったり、今後改善すべき課題も残りました。



写真 黄鉄鉱ひろい。

根室市民フォーラム“道東の自然と科学教育を考える”開催報告

七山 太・中川 充（地質情報研究部門）

7月18日午後3時～6時、根室市民を対象とした“道東の自然と科学教育を考える”と題する自然科学普及フォーラムが根室市総合文化会館において開催された。参加者は50名ほどで、そのうち10名は北海道教育大学の学部生、3名は地元のマスコミ関係者であった。今回の主

催は根室市教育委員会（根室市立歴史と自然の資料館）であり、これに北海道教育大学釧路校、日本堆積学会、根室市、産業技術総合研究所北海道産学官連携センターが共催して実施された。またこのフォーラムは、春の訪れの遅い北海道での“地質の日”事業推進委員会の認定行事であり、

今年度の“地質の日”の行事を締めくくるものともなった。

講演会のプログラムは根室市立歴史と自然の資料館の猪熊樹人学芸員、根室市民ボランティアの高野建治氏と七山が共同で作成した。前半の3件の講演は北海道教育大学釧路校の栢野先生、蛭田先生、池田先生に教育者の立場からの講演をお願いし、後半の2件は産総研の中川と七山が地元根室に関連した最近の地質関連の話題を提供した。講演内容は以下の通りである。

講演1：科学と教育の視点からサイエンスフェアを考えよう

北海道教育大学釧路校 准教授 栢野彰秀

講演内容：子供に科学のおもしろさや自然の不思議、発見の喜びや感動を提供するためにサイエンスフェアが毎年開催されている。本講演では、サイエンスフェアに出品された一つの展示物を取り上げて、その展示物がどのような科学的知識や概念が用いられて作られているかも参加者と一緒に考えた。

講演2：釧路市春採湖ザリガニ事情

北海道教育大学釧路校 教授 蛭田眞一

講演内容：釧路市民の憩いの場春採湖は、特定外来生物ウチダザリガニの繁殖により大きな影響を受けている。平成16年の調査で湖岸全域での生息が確認され、18-20年と釧路市による調査と捕獲が実施されてきた。そして16年からこれまでに5千匹近くが春採湖から排除されたが、まだ多数個体が棲息する。春採湖に注ぐ湧水からの流れに生息している在来種ニホンザリガニも含めて、春採湖のザリガニ事情を詳しく紹介した。

講演3：むかしむかしのねむろ

北海道教育大学釧路校 教授 池田保夫

講演内容：根室の海岸にでてみると、太平洋側にゆるく傾いた縞々模様の地層や「車石」に代表される玄武岩の溶岩や岩床をいたるところでみることができる。これらは根室半島を作っている最古の岩石である。それは、はるか六千五百万年前、古千島海溝とオホーツク古陸の間に横たわっていた海底にその起源を求めることができることを解説した。

講演4：根室を襲った巨大津波の忘れ物？

産業技術総合研究所 主任研究員 七山 太

講演内容：根室の湿地を掘ってみると、泥炭の間に海岸の砂が層になって存在することが分かってきた。実はこれらの砂の層は、私たちの祖先が体験した津波を遙かに上回る巨大津波が湿原に残していった忘れ物であると推定されている。巨大津波の忘れ物の意味について、根室市民と情報を共有し会場で共に考えることを試みた。

講演5：根室十景と北海道地質百選

産業技術総合研究所北海道産学官連携センター

総括主幹 中川 充

講演内容：根室には自然の作った魅力的な景観がたくさん

ある。市民主体で選ばれた「根室十景」はそれらの代表といえよう。国の天然記念物に指定されている「車石」ほか、地質に関係するものも多いので、地面からの視点でこれらを見ていきたい。また、道内各地にあるこうした景観を通じて、地域と地質の魅力が発掘できる。その際のお手伝いができるよう、現在地質学会北海道支部の活動として北海道地質百選< <http://www.geosites-hokkaido.org/> >を公募中である。

翌7月19日午前には、根室市民向けの巡検が根室市主催で開催され、Stop 1では、南部沼湿原の巨大津波痕跡を、Stop 2では、春国岱に認められるゴーストフォレスト(塩水によって立ち枯れたアカエゾマツの林)を見学した。当日は天候不良のため、参加者は、教育大の学生10名と根室市民9名とやや少なめではあったが、参加した人たちには、根室～釧路地域を近い将来を襲うことが予測されている地震津波の危機感を十分に感じ取っていただけたと主催者側は考えている。



写真1 フォーラムの最後を締めくくる中川による北海道地質百選の講演風景。



写真2 悪天候の中実施された市民巡検風景。地震津波の話題に対する根室市民の緊迫感が案内者側として感じとれた。

地質標本館夏休み体験学習イベント

辻野 匠・兼子 尚知・坂野 靖行・中澤 努・荻野 慎太郎 (地質情報研究部門) , 奥山 康子 (地圏資源環境研究部門) , 中島 礼 (地質調査情報センター) , 利光 誠一・青木 正博 (地質標本館)

今年も8月の下旬に地質標本館の夏休み体験学習イベントを開催しましたので、その様子を簡単にお知らせします。なお、この時期には例年のように複数の大学から博物館の実務実習のために学生が訪れており、この体験学習イベントの指導補助を実習として行っていただきました。

化石クリーニング教室

8月21日(金)に地質標本館1階多目的展示室を使って、「化石クリーニング教室」を開催しました(写真1)。昨年までは、「化石クリーニング体験」として、予約なしで開催していたイベントですが、今年は事前予約制として、これまでより人数を制限して、その分、体験時間を少し多めにとって化石クリーニングの体験を堪能していただき、あわせて化石鑑定や植物化石からわかることを学習する時間も増やすことにしました。2時間を1サイクルとして、午前、午後の各1サイクルずつ行い、定員も各10名ずつとしました。2時間の内、半分以上(前後30分ずつ)は学習時間にあてますので、実質的な化石クリーニングの体験時間は1時間くらいですが、大半の子供たちはほぼ満足できるくらい岩石を割ってクリーニングをしました。材料は例年のように、木の葉の化石を多産する栃木県那須塩原市の湖成泥岩にしました。これまでは、いくら化石が多産する岩石といっても化石が出ない場合ありましたが、今回は時間を十分とったこともあって、子供たちはいくつも化石を発見することができたようです。一般的な指導は地質情報研究部門の辻野が主導し、地質標本館で塩原の木の葉化石を研究されてきた尾上亨博士とともに化石の鑑定にあたりました。そして最後に、全員を集めて植物の葉の鑑定の仕方を教授しました。また、今回も1点ですが昆虫の化石が見つかったので、それを題材として昆虫化石の見方についても話をしました。子供たちは、自分で取り出した化石を記念品として持ち帰ることになり、大いに目を輝かせていました。

地球何でも相談日

8月22日(土)に地質標本館の1階ホールで恒例の「地球何でも相談日」が開催されました。このイベントは夏休みに採集した岩石・鉱物・化石などの標本の鑑定に協力することで、小中学生に夏休みの自由研究などのお手伝いをしようというものです。例年、いろいろな所へ採集に出かけたり、旅先や両親の実家に行ったりした際に入手した標本が持ち込まれます。今年は、岩石4件、鉱物3件、化石4件と鑑定の件数は少なかったのですが、岩石を50個持ち込む方もありました。また、砂の観察をする自由研究

を持ち込んだ小学6年生と中学生が各1名あり、スタッフはルーペや顕微鏡の使い方も含めて、観察方法や自由研究の進め方をアドバイスしました(写真2)。青森から沖縄までの、実に全国16カ所を回っての採集品ですので、これを支えたご家族の執念が垣間見られました。また、鉱物の結晶の形や石の磨き方、誕生石の由来など、質問のみの相談も3件ありました。

この日は、博物館実習生の指導による化石折り紙やエキジョッカー(ペットボトルを用いた簡易的な地盤の液状化実験装置)の説明などのサブイベントも並行して行いました。恐竜やアンモナイト、三葉虫などの折り紙を記念に持ち帰る子供たちのうれしそうな顔が印象的でした。



写真1 化石クリーニングで木の葉の化石を取り出したところ。博物館実習生が子供たちを指導。



写真2 自分の採集した砂のサンプルを顕微鏡でのぞき込んでいる相談者に後ろからスタッフが観察の仕方をアドバイスしている様子。前には管瓶に入った採集品が並んでいる。

2009 GeoCoast International Workshop: Geosciences' Role on the Issues of Coastal Geohazards 参加報告

七山 太 (地質情報研究部門)

2009年9月1-4日、韓国中部のDaejeon広域市において、2009 GeoCoast International Workshop: Geosciences' Role on the Issues of Coastal Geohazardsが開催された。会場は韓国側のホスト組織であるKIGAM (Korea Institute of Geoscience and Mineral Resources)のジュラシックホールであった。

本ワークショップの主催は前述のKIGAMならびにCCOP (Coordinating Committee for Geoscience Programmes in East and Southeast Asia)であり、韓国の文部科学技術省 (MEST) のUnited Nations Development Program (UNDP) が財政支援した。この支援によって、CCOPおよびSOPAC (Pacific Islands Applied Geoscience Commission) の加盟国および事務局から1~2名の研究者もしくは事務担当者がフルサポートで招聘された (写真1)。地質調査総合センターもしくは日本からも沿岸自然災害に関わる2名の研究者の参加が期待されたが、今回は地質情報研究部門沿岸堆積研究グループの七山が代表してこれに参加し、2件の基調講演の責務を全うした。

ワークショップにおいては、まず、各国の沿岸自然災害、即ち地球温暖化に伴う海面上昇および沿岸浸食、沿岸地盤沈下、サイクロン・台風の巨大化と沿岸災害、巨大津波による沿岸災害、等の研究事例が紹介された。但し、招聘されたのは研究者のみではなく、しかも沿岸研究とは縁遠い方も約半数を占めた。このため、報告内容も国際学会発表レベルの話題からカントリーレポートの棒読みレベルまで多様であった。中にはカントリーレポートすら準備できなかった参加国もあった。

この中でホスト国である韓国の沿岸研究に関するレベルは、KIGAM, KORDI (Korea Oceanographic Research and Development Institute) ならびに韓国内の大学のスタッフ共に総じて高く、特に潮汐研究の分野では、質量共に日本を凌駕しているように見えた。また、KIGAMは組織として、フィジー、サモア、パプアニューギニア等のSOPAC加盟国と連携し、南太平洋で幅広く共同研究を展開している状況が感じ取れた。

ワークショップの最後には、(1) 沿岸自然災害の現状、(2) 沿岸自然災害の将来、(3) 沿岸自然災害の為のMitigationとAdaptation、(4) 地球科学および地球科学研究者の役割、4点について意見交換が行われた。しかし、沿岸自然災害の問題は多様であり各国毎に状況が大きく異なる。しかも公共土木工事と関連した極めて政治的な問題であり、純粋な研究者の立場で、地球科学者がこの問題に貢献すること

はとても難しいと議論を聞いていて感じた。例えば、日本の海岸はほぼ70%以上がコンクリートで護岸されており、もしこのような話題で議論を行うならば、土木工学分野の研究者も交えて議論しなくては、何事も前進しないし解決もしないであろう、と考えた。

ワークショップ終了後、韓国中部西岸Taeanhaean国立公園の巡検が行われた。最初にGanweolhoでは農地確保のために作られた巨大な防潮堤を見学した。この地の状況は九州諫早湾干拓地問題と共通した課題があるようであった。現在の韓国でも我が国と同様に高度成長期の数10年に立てられた干拓地推進政策にストップがかけられている模様であった。

Manripo Beachでは、モンスーンによって支配されたマクロ潮汐海岸 (大潮時の潮差約6m) の現行堆積過程につ



写真1 CCOPおよびSOPAC加盟国からのワークショップ参加者。下段中央がKIGAMのHo Wan Chang所長。



写真2 マクロ潮汐海岸であるManripo Beachの現行堆積過程について説明するInha UniversityのGuan-Hong Lee教授ならびにSOPACアドバイザーであるBGS (British Geological Survey) のDavid R. Tappin教授。夏は黄海側からの波高が低く、比高差の少ないバーとトラフが繰り返す多重バーの海浜地形を示す。

いて Inha University の Guan-Hong Lee 教授に説明していただいた(写真2)。特に現地観測装置(TISDOG)やビデオモニタリングシステムを用いた海岸土砂移動観測の技術には感銘を受けた。Sinduri Beachにおいてもマクロ潮汐海岸のビーチシステムとその背後に発達した砂丘の現行堆積過程を説明していただいた。これら韓国西岸の黄海沿岸地域は冬の北からの強いモンスーンによって暴浪に常時襲

われるビーチとして、夏は台風襲来時を除いて波浪が低く砂質干潟として機能することが理解できた。

なお、本ワークショップ開催中は、KIGAMのHo Wan Chang所長を筆頭に、海洋関係者が総出で対応し、私も大層なもてなしを受けた。この場を借りて、KIGAM関係者に対し、厚く御礼申し上げたい。

ジオネットワークつくば 始まりました

植木 岳雪(地質調査情報センター)

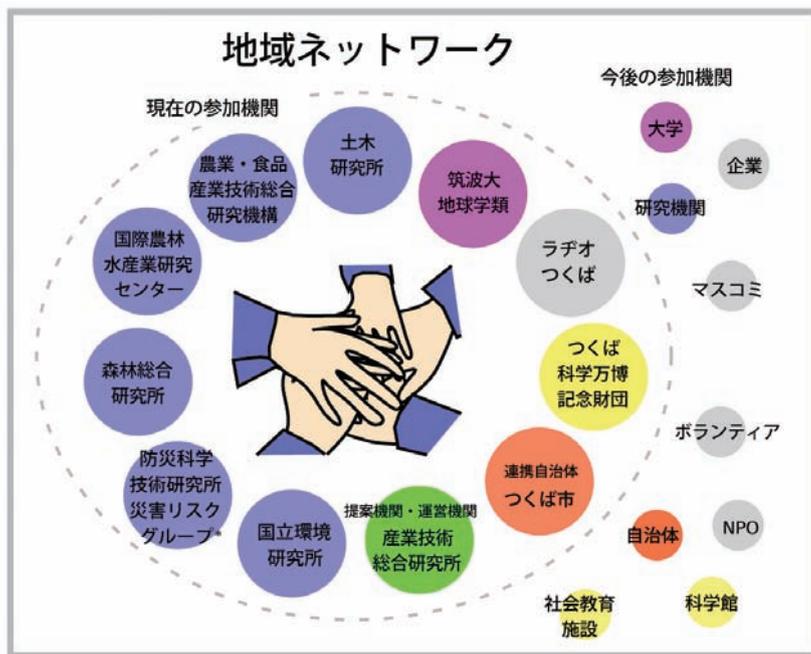
「ジオネットワークつくば」は、(独)科学技術振興機構(JST)による地域科学技術理解増進活動推進事業の中の「地域ネットワーク支援」事業に採択されて発足した地域ネットワークです。提案機関・運営機関は産総研、連携自治体はつくば市、現在の参加機関は(独)国際農林水産業研究センター、(独)土木研究所、(独)森林総合研究所、(独)農業・食品産業技術総合研究機構、筑波大学生命環境学群地球学類、(財)つくば科学万博記念財団、つくばコミュニティ放送株式会社(ラヂオつくば)、(独)防災科学技術研究所・災害リスク情報プラットフォームプロジェクト・リスク研究グループです。事務局は地質調査情報センターに置かれています。

ジオネットワークつくばは、国際惑星地球年(IYPE)をきっかけにして始まりました。まずIYPE日本に参加する研究機関とつくば市を核として、今後3年間に、つくば地域の研究・教育機関、自治体、企業、マスコミ、NPO法人などの参加を拡大します。ジオネットワークつくばでは、児童・生徒、市民の科学や地球環境に関するリテラシーと意識の向上を目指し、さまざまな活動を組織的・体系的・発展的に行います。具体的には、野外や室内で調査・研究を体験できる活動を主体とし、常設展示、サイエンスカフェ、地球と環境に関するコンテスト、年度末

に発表会などを行います。また、地域ネットワークの継続とリーダー養成のために「ジオマイスター」制度を開設・運営します。これらの活動は、低炭素社会を目指すつくば環境スタイルの定着や地域力・防災力の強化に貢献します。

今後、GSJのみなさまのご参加・ご協力もどうぞよろしくお願いいたします。詳しくは、ジオネットワークつくばのホームページをご覧ください。

<http://www.geonet-tsukuba.jp/>



* 防災科学技術研究所・災害リスク情報プラットフォームプロジェクト・リスク研究グループ

図 ジオネットワークつくばのイメージ。

ジオネットワークつくば 第1回サイエンスカフェ開催

植木 岳雪(地質調査情報センター)

ジオネットワークつくばの第1回サイエンスカフェが9月11日の18時から20時にエキスポセンターのレストランで行われました。講師は東京大学大学院新領域創成

科学研究科教授の山室真澄さんで、講演題目は「身近な水から考える環境と暮らし」でした。埼玉県の中山のダムの水が首都圏の窒素酸化物で汚染されていること、霞ヶ浦

の水の塩素消毒によってつくば市の水道水に有機化合物が含まれていること、霞ヶ浦におけるアサザの栽培が景観の保全にはなっていないにもかかわらず水質浄化には役立っていないこと、水底の植物を人工的に除去することによって湖の生態系が維持されてきたこと（それを「里湖」と言うそうです）などを取り上げてもらいました。

山室さんは70枚にもおよぶスライドを作り、90分間も熱弁をふるっていただきました。参加者はコーヒーを楽しむことも忘れ、その講演に引き込まれてあっという間に時間が過ぎました。一般の参加者は18名で、環境に興味・関心が高い方達でした。講演の間と終了後には活発な質疑応答が行われ、その内容もかなり専門的なものが多く、時間切れでついに打ち切りになってしまいました。当日はラヂオつくばのインタビューと収録も行われ、今後ラジオの番組として放送されるそうです。

今後のサイエンスカフェは、10月7日に（独）森林総



写真 講演後の質疑応答の様子。

合研究所の吉永秀一郎さんによる「森もメタボに?」、10月16日に筑波大学地球学類の林陽生さんによる「筑波山頂での気象観測よもやま話」、10月30日に（独）土木研究所の品川俊介さんによる「地盤に含まれる天然の重金属」についての講演を行います。みなさま、ご期待下さい。

スケジュール	
10月7日	ジオネットワークつくば 第2回サイエンスカフェ 「森もメタボに? -筑波山周辺の森林が危ない-」 (つくば, エキスポセンターレストラン澗) http://www.geonet-tsukuba.jp/cafe
10月9日	地質地盤協議会 意見交換会(秋葉原, 富士ソフトアキバプラザ)
10月15・16日	産総研オープンラボ(つくば, 産総研つくばセンター) https://www.aist-openlab.jp/
10月16日	ジオネットワークつくば 第3回サイエンスカフェ 「筑波山頂での気象観測よもやま話-地球温暖化時代におけるモニタリングの役割-」 (つくば, エキスポセンターレストラン澗) http://www.geonet-tsukuba.jp/cafe
10月18日~25日	CCOP第46回年次総会(18~23日) CCOP第54回管理理事会(24~25日) (ベトナム, ブンタウ)
10月28日	第6回日本ジオパーク委員会(霞ヶ関, 経済産業省)
10月30日	ジオネットワークつくば 第4回サイエンスカフェ 「地盤に含まれる天然の重金属 -危ないのか, 危なくないのか-」 (つくば, エキスポセンターレストラン澗) http://www.geonet-tsukuba.jp/cafe



編集後記
植木 岳雪 (地質調査情報センター)

地質調査企画室に来てから、激動の1年でした。GSJがどのように動いているか、裏方の苦労がわかりました。当初は議事録とは何かも知りませんでした。しかし、今となってはニュースレターの原稿などちょよいのちょいです。このニュースレターの編集が一応最後の仕事です。

つくばの自然と環境を知る「ジオネットワークつくば」も始まりました。3年間の国際惑星地球年(IYPE)日本の3年間のまとめの活動もあります。それらをもう少しお手伝いすることになりそうです。私は結構いいかげんな性格で、皆様にはご迷惑ばかりをおかけしましたが、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

GSJ Newsletter No.60 2009/9

発行日: 2009年9月30日
発行: 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
編集: 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査情報センター
脇田 浩二(編集長)
植木 岳雪(編集担当)
志摩 あかね(デザイン・レイアウト)
〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672

GSJニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

地質調査総合センターホームページ
<http://www.gsj.jp/>